

# 論文和文概要

(2000字程度)

報告番号	甲 第 27 号	氏名	郭瑞
------	----------	----	----

国家としての中国は複雑な歴史的背景をもっている。建築における近代化という問題を考えるとき、満州国と民国との関係、日本や欧米との関係が複雑に絡み合い、その実相を把握することは容易ではない。当時の政治的、社会的背景のため、中華民国の建築界と満州の建築業界は何の接点もなく、関連する先行研究においても、同時期に活躍した両者を同時に分析したこともない。現代の中国を踏まえて近代化の萌芽を振り返ると、中華民国の建築史を研究する際に東北の満州地方の建築開発を無視したり、満州地方の近代建築開発に注目する際に中国の建築家が推進した建築活動と両者に視点を置くことができないことがしばしば発生している。そのため、本研究では、中国建築版図の重要な一部となっている満州の建築を視野に入れつつ、最初の中国建築学会が設立された1930年から日中戦争が起こる1937年まで、中国における近代建築の萌芽期に育まれた建築思潮を多角的に明らかにすることを目的としている。日本は1905年の日露戦争の勝利により中国東北の満州の統治権を獲得した。1920年には、植民地初期の満州において、建築学術団体としての「満州建築協会」が発足した。一方、1928年北伐戦争の後、社会生活は安定的になり、建築界の成長のための契機をも与えられた。1930年代初頭、中国人建築家が主導する建築団体は北京、上海に相次いで設立され、設計活動とともに研究活動が展開された。その結果、日中戦争が起こる1937年までの安定期において、双方の活動は、相互交流はないものの、中国における都市の変容と建築文化の歴史的発展に大きな影響を及ぼした。これは中国の建築近代化の萌芽期における重要な二軸と考えられる。そのため本論文においては、以上の建築学術団体によって刊行された『中国营造学社類纂』、『中国建築』、『建築月刊』、『満州建築協会雑誌』の創刊号から日中戦争の起こる前の最終号に掲載された文献を通覧し、そのうち著者の主張が明確な論文、記事、社説などの文献468篇を対象に選定した。その内容を把握するために、まず、著者の主張や関心事が明確に現れている段落をキーセンテンスとして抽出した。次に、キーセンテンスから事象、状態、コメント等を表現する名詞或いは名詞化動詞等を選定し、中心的な内容を代表するキーワードとして抽出した。さらに、キーワードの意味する対象の語義に基づいてグループ化し、その表す内容により、大項目の「カテゴリー1」を設定する。その後、カテゴリー1の示す分野領域により、小項目の「カテゴリー2」を設定する。以上のステップにより、文献対象とその主旨を類型化した。カテゴリーごとに属するキーワードの指摘頻度を集計して、統計的考察を行った。定量的な統計処理により、注目することによって、激動の歴史に一つの道を見出そうとすることに本研究の特徴がある。

本論は全6章からなる。第1章で本研究の背景および意義、また研究対象と方法の有効性を述べる。第2章で中国建築学界において、自らの民族様式の起源を探究のため、様式と格式の検討を中心とする建築意匠に関する言説が、建築思潮の主幹となったことを明らかにした。第3章で中国建築学界における欧米と日本に関する言説はそれぞれ科学技術の分野と建築文化の分野に焦点を当てていたとわかった。欧米の学者の影響は中国建築学界に自国の古代建築の研究に根拠を提供し、日本人の学者が中国の建築学界に古代建築の研究手法にフィールドワークなどの新たな考え方を提供したことを明らかにした。第4章で満州建築協会の建築思潮の脈絡を抽出することができ、建築を背景とした言説は設計方法論と意匠論の2つの分野に集中し、新興満州国の国家イメージを目指す議論はこの時期の建築思潮の主軸を構成している。2つ目は満州地方を中心とした古建築の考察に基づき、立法による満州建築文化体系の確立に向けた脈絡が形成されたことを明らかにした。第5章で満州建築協会において、日本の新しい建築材料と設備及び職人の教育方法、また北京や瀋陽などの中国主要都市の建築史的、都市史的分析、また欧米の都市計画理論と建築様式の考察と、対象が目まぐるしく替わったことを明らかにした。第6章では明らかにされた各章の成果をもって本論全体の結論を述べる。

考察により、中国人建築家集団と満州建築協会の位置づけが明確になった。前者の民国政府が統治する区域においては、建築意匠に関する言説は、中国における建築近代化の主たる駆動力となった。中国人建築家集団の主導による、自らの民族様式の源泉への探求することがその背後にある。一方、東北部の植民地、満州において、満州建築協会は主として満州における建築・都市史の研究を積極的に展開し、日本と欧米から建造技術と建材、都市計画理論と様々な建築様式を満州へ導入し、中国における建築近代化の過程で多様化を推進する役割を演じたことを明らかにした。両者には政治的状況から相互交流はなかったものの、第二次大戦後、両者の成果は中国における近代建築の発展の基礎となった。